

各火山の 9 月の活動解説

【北海道地方】

めあかんだけ 雌阿寒岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

26 日から 29 日に実施した現地調査では、前回（2016 年 6 月）の観測で低下がみられたポンマチネシリ 96-1 火口の噴煙の勢いはさらに低下しており、前回の観測で明瞭な縮小がみられたポンマチネシリ第 3 火口及び第 4 火口の地熱域は消散していた。これらのことからポンマチネシリ火口の熱活動は低下しているとみられる。赤沼火口については、噴煙の勢いや地熱域に変化はなく、前回温度上昇がみられた西方噴気孔の最高温度は、2015 年 11 月以前の状態に戻っていた。

ここ数年、地震増加、浅部熱活動の活発化を示す 96-1 火口の噴煙量増加や全磁力¹⁾の減少などがみられていることから、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

とからだけ 十勝岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

12～13 日、20 日に現地調査を行った。噴煙のため 62-2 火口内は確認できなかったが、前回（2016 年 7 月）の調査と同様に、振子沢噴気孔群の刺激臭を伴った噴気や前十勝頂上付近の複数の列状の噴気を引き続き確認した。また、赤外熱映像装置²⁾による観測では、昨年の現地調査以降確認されている、振子沢噴気孔群の地熱域の拡大した状態が継続していた。62-2 火口周辺では、引き続き熱活動が活発な状態が継続している。

ここ数年、山体浅部の膨張、大正火口の噴煙量増加、地震増加、火山性微動の発生、発光現象及び地熱域の拡大などを確認しており、長期的にみると十勝岳の火山活動は高まる傾向にあるので、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

たるまきさん 樽前山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動は概ね静穏に経過しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められない。

山頂溶岩ドーム周辺では、1999 年以降、高温の状態が続いているので、突発的な火山ガス等の噴出に留意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

アトサヌプリ [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

たいせつざん
大雪山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

くつたら
倶多楽 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

うすざん
有珠山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

ほっかいどうこまがたけ
北海道駒ヶ岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

えさん
恵山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

【東北地方】

あきたこまがたけ 秋田駒ヶ岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

女岳の山頂付近では、地熱域が引き続き確認されている。

地震活動は低調で、地殻変動及び噴気活動にも変化はみられないが、地熱活動が続いているので今後の火山活動の推移に留意が必要である。

ざおうざん 蔵王山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

22 日から 25 日にかけて、火山性微動が 3 回発生した。火山性地震は少ない状態で経過したが、火山性微動が発生した 22 日以降わずかな増加がみられた。

23 日に現地調査を実施した結果、御釜周辺に噴気及び地熱域はみられなかった。また、丸山沢の地熱や噴気の状態、振子沢の状態は、前回（2016 年 8 月 23 日）と比較して特段の変化は認められなかった。

蔵王山では、2013 年から 2015 年にかけて火山活動の高まりがみられた。その後も火山性地震や火山性微動が時々発生していることから、今後の火山活動の推移に留意が必要である。

あづまやま 吾妻山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

大穴火口及び周辺の地熱活動が継続している。

27 日に実施した現地調査では、大穴火口の噴気及び大穴火口周辺の地熱域の状況に特段の変化は認められなかった。昨年（2015 年）10 月に新たに噴気を確認した大穴火口北西では、複数の弱い噴気及び地熱の高い領域を引き続き確認したが、大きな変化は認められなかった。

大穴火口付近では小規模な噴火が発生する可

能性があるので、大穴火口周辺（火口から概ね 500m の範囲）では弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。大穴火口の風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石³⁾、火山ガスに注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

いわきさん
岩木山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

はっこうださん
八甲田山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

とわだ
十和田 [噴火予報（活火山であることに留意）]

あきたやけやま
秋田焼山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

いわてさん
岩手山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

ちょうかいさん
鳥海山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

くりこまやま
栗駒山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

あだたらやま
安達太良山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

ばんだいさん
磐梯山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

【関東・中部地方及び伊豆・小笠原諸島】

くまつしらねさん 草津白根山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

湯釜火口の北から北東内壁及び水釜火口の北から北東側にかけての斜面での熱活動や、北側噴気地帯での活発な噴気活動が継続している。東京工業大学によると、北側噴気地帯のガス組成と湯釜湖水の化学成分には火山活動の活発化を示す変化が引き続きみられ、湯釜の水温は平年よりも高い状態が続いている。

小規模な噴火が発生する可能性があることから、湯釜火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。噴火時には、風下側で火山灰や小さな噴石³⁾が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

また、ところどころで火山ガスの噴出が見られ、周辺のくぼ地や谷地形などでは滞留した火山ガスが高濃度になることがあるので、注意が必要である。

あさまやま 浅間山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

山頂火口からの噴煙は白色で、噴煙の高さは火口縁上概ね 300m 以下で経過している。

山頂火口で、夜間に高感度カメラで確認できる程度の微弱な火映⁴⁾が 8～9 日にかけて観測された。

15 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾は 1 日あたり 400 トン（8 月：200～500 トン）とやや少ない状態だった。

山頂火口直下のごく浅い所を震源とする体を感じない火山性地震は多い状態となっており、火山活動はやや活発な状態で経過している。

今後も火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるため、山頂火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。また、風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石³⁾に注意が必要である。

にいがたやけやま 新潟焼山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

山頂部東側斜面の噴気孔からの噴煙の高さは、火口縁上概ね 400m 以下で経過している。2015 年夏頃から噴煙はやや高く上がる傾向が認められ、12 月下旬からは噴煙量も多くなっている。

2016 年 5 月 1 日以降、振幅の小さな火山性地震がやや増加し、5 月 4 日以降は低周波地震も時々発生したが、その後、火山性地震は次第に減少し、今期間は少ない状態で経過している。ただし、2015 年以降の地震回数は、2014 年以前と比べてやや多い状態が続いている。

GNSS⁶⁾による地殻変動観測では、2016 年 1 月頃から新潟焼山を南北に挟む基線で伸びがみられている。

今後も、想定火口内（山頂から半径 1 km 以内）に影響を及ぼすような噴火が発生するおそれがあるため、火山活動の推移に注意が必要である。

みだかはら 弥陀ヶ原 [噴火予報（活火山であることに留意）]

弥陀ヶ原近傍の地震は少ない状態で経過している。

以前から熱活動が活発である立山地獄谷では、2012 年 6 月以降の観測で噴気の拡大・活発化や温度の上昇傾向が確認されているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。また、この付近では火山ガスに注意が必要である。

おんたけさん 御嶽山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

遠望カメラによる観測では、白色の噴煙が火口縁上概ね 300m 以下の高さで経過している。

火山性地震は少ない状態で経過しているが、2014 年 8 月以前の状況には戻っていない。27 日 20 時 05 分頃から継続時間約 3 分 30 秒の振幅の小さな火山性微動が発生した。火山性微動を観

測したのは、2016 年 5 月 19 日以来である。微動に伴い、傾斜計⁷⁾にわずかな変化がみられたが、噴煙の状況や空振計に特段変化はみられていない。

2014 年 10 月以降噴火の発生はなく、火山活動は緩やかな低下傾向が続いているが、火口列からの噴煙活動や地震活動が続いていることから、今後も小規模な噴火が発生する可能性がある。

火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。風下側では降灰及び風の影響を受ける小さな噴石³⁾に注意が必要である。

はこねやま箱根山【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

大涌谷に設置している火口カメラによる観測では、大涌谷の火口や噴気孔及び温泉供給施設から引き続き噴気が勢いよく噴出しているのを確認している。大涌谷周辺での噴気の高さは概ね 400m 以下で経過している。

火山性地震の発生は少なく、地震活動は低調に経過している。また、地殻変動観測では、特段の変化は見られていない。

一方、大涌谷周辺の想定火口域では、噴気活動が活発なところがある。大涌谷周辺の想定火口域では、噴気や火山ガスに引き続き注意が必要である。

いずのおおしま伊豆大島【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

27 日に実施した現地調査では、三原山山頂火口内にある中央火孔の最高温度は約 39℃で、1999 年以降ほぼ同じレベルで経過している。また、中央火孔内の地表面温度分布²⁾は、前回（7 月 29 日）の観測と比べて特段の変化は認められない。その他、三原山山頂周辺の噴気温度にも特段の変化は認められない。

火山性地震は少ない状態で経過している。震源は三原山周辺の浅いところと西方沖に分布している。

地殻変動観測では、短期的な膨張や収縮を繰り返しながら、長期的には地下深部へのマグマ供給によると考えられる島全体の膨張傾向が続いている。その他の観測データには特段の変化はなく、噴火の兆候は認められない。

みやけじま三宅島【噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）】

2 日に実施した現地調査及び 26 日に陸上自衛隊の協力で実施した上空からの観測では、主火口内及びその周辺で引き続き高温領域²⁾が認

められ、前回の観測（現地調査：2016 年 8 月 5 日、機上観測：2016 年 1 月 21 日）と比べて、火口内の地形及び高温領域の分布に特段の変化は認められなかった。

火山性地震は少ない状態で経過している。震源は山頂火口直下に分布しており、これまでと比べて特段の変化は認められない。火山性微動は観測されていない。

主火口における噴煙活動及び火山ガスの放出が継続していることから、火口内では噴出現象が突発的に発生する可能性があるため、山頂火口内⁸⁾及び主火口から 500m 以内では火山灰噴出に警戒が必要である。また、火山ガスの放出が継続していることから、風下にあたる地域では火山ガスに注意が必要である。

にしのおしま西之島【火口周辺警報（火口周辺危険）】

海上保安庁が 15 日に実施した観測では、火口からの噴気や火山ガスの放出は確認されなかった。熱計測画像からは、第 7 火口の火口縁及び火砕丘周辺の溶岩原に地表温度の高い領域が点在していたが、前回（8 月 18 日）の観測結果と比較して顕著な温度分布の変化や温度上昇等、特段の変化は認められなかった。

西之島の海岸線に幅約 100m～1,000m の範囲に薄い褐色の変色水域が分布していた。

西之島南方の西之島南海丘及び付近海域において変色水域等、特段の変化は認められなかった。

西之島では、火山活動の低下が認められるものの、火口付近には高温領域が引き続き確認されている。火道域に海水が浸入した際には小規模な噴火が発生する可能性があることから、火口から概ね 500m の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。また、これまでの噴火で流れ出した溶岩は、内部が高温になっていると考えられるほか、海岸部では崩れやすくなっているため、火口から概ね 500m を超える範囲でも注意が必要である。

いおうとう硫黄島【火口周辺警報（火口周辺危険）及び火山現象に関する海上警報】

火山性地震はやや少ない状態で経過している。GNSS⁶⁾連続観測によると、地殻変動は隆起及び停滞を繰り返している。

硫黄島の島内は全体に地温が高く、多くの噴気地帯や噴気孔があり、過去には各所で小規模な噴火が発生している。火山活動はやや活発な状態で推移しており、火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生すると予想されるため、従来から小規模な噴火が発生した地点（ミリオンダラーホ

ール（旧噴火口）等）及びその周辺では噴火に警戒が必要である。

福岡ノ場 [噴火警報（周辺海域警戒）及び火山現象に関する海上警報]

海上保安庁海洋情報部、第三管区海上保安本部、海上自衛隊及び気象庁によるこれまでの観測によると、福岡ノ場付近の海面には長期にわたり火山活動によるとみられる変色水等が確認されている。

今後も小規模な海底噴火が発生すると予想されるので、周辺海域では噴火に警戒が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

那須岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

日光白根山 [噴火予報（活火山であることに留意）]

焼岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

乗鞍岳 [噴火予報（活火山であることに留意）]

白山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

富士山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

伊豆東部火山群 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

新島 [噴火予報（活火山であることに留意）]

神津島 [噴火予報（活火山であることに留意）]

八丈島 [噴火予報（活火山であることに留意）]

青ヶ島 [噴火予報（活火山であることに留意）]

【九州地方及び南西諸島】

九重山 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動に特段の変化はなく、噴火の兆候は認められないが、GNSS⁶⁾ 連続観測によると、一部の基線で伸びの傾向が認められるので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

阿蘇山 [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

中岳第一火口では、噴火は観測されていない。遠望観測では白色の噴煙が最高で火口縁上 1,000m まで上がった。

9 月に実施した現地調査では、中岳第一火口内に灰白色から灰緑色の湯だまりを確認した。

また前月に引き続き、ごく小規模な土砂噴出を確認した。湯だまりの量は中岳第一火口底の 7 割であった。

赤外熱映像装置²⁾ による観測では、湯だまり表面の最高温度は約 70°C（8 月：約 70°C）と特段の変化はなかった。南側火口壁の最高温度は 190~220°C（8 月：170~200°C）であった。

26 日、27 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾ は、1 日あたり 3,100 トン、2,100 トン（8 月：1,500~1,900 トン）と多い状態であった。

火山性微動の振幅は、13 日からやや小さな状態で経過した。火山性地震は 28 日以降概ね多い状態で経過した。孤立型微動⁹⁾ は概ねやや多い状態で経過した。

火山性地震の震源は、中岳第一火口付近および火口の南西から西側の海拔 0 km 付近と草千里の西側の海拔下 6 km に分布した。

傾斜計⁷⁾ では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められなかった。

GNSS⁶⁾ 連続観測では、深部にマグマだまりがあると考えられている草千里を挟む古坊中一長陽（国）の基線で 2016 年 7 月頃からわずかな伸びの傾向が認められており、深部のマグマだまりの膨張の可能性が考えられる。

中岳第一火口では、火山性微動の振幅がやや大きく、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量が多い状態であり、今後も火口周辺に影響を及ぼす噴火が発生する可能性がある。

火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾ 及び火砕流¹⁰⁾ に警戒が必要である。風下側では降灰、風の影響を受ける小さな噴石³⁾ 及び火山ガスに注意が必要である。

雲仙岳 [噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]

火山活動に特段の変化はないが、長期的には 2010 年頃から火山性地震の活動がやや活発となっているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

霧島山（新燃岳） [火口周辺警報（噴火警戒レベル 2、火口周辺規制）]

遠望観測では噴煙は火口縁を超えるものは認められず、火口内で消散した。

23 日に新湯温泉付近から実施した現地調査では、2008 年 8 月の噴火で形成された西側斜面の割れ目付近で引き続き弱い噴気が認められた。赤外熱映像装置²⁾ による観測でも引き続き、弱い熱異常域を確認した。

火山性地震は時々発生した。17 日に継続時間が 1 分未満の振幅の小さな火山性微動を観測し

た。火山性微動を観測したのは 2015 年 3 月 1 日以来である。

傾斜計⁷⁾では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められなかった。

GNSS⁶⁾連続観測によると、新燃岳の北西数kmの地下深くにあると考えられるマグマだまりの膨張を示す地殻変動は、2015 年 1 月頃から停滞している。また、新燃岳周辺の一部の基線で、2015 年 5 月頃からわずかに伸びの傾向が認められていたが、2015 年 10 月頃から停滞している。

新燃岳ではこれまでも火山性地震が時々発生しており、火口内及び西側斜面では弱い噴気や熱異常域が確認されていることから、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

新燃岳では火口周辺に影響を及ぼす小規模な噴火が発生する可能性があるため、新燃岳火口から概ね 1 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石³⁾（火山れき¹¹⁾）が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

きりしまやま **霧島山（えびの高原（硫黄山）周辺）[噴火予報（活火山であることに留意）]**

遠望観測では硫黄山で時々噴気が観測されており、7 日と 24 日に最高で稜線上 20m まで上がった。

火山性地震は時々発生し、月回数は 34 回（8 月：32 回）と少ない状態であった。震源は、主に硫黄山付近の海拔下 0～2 km に分布した。火山性微動は 2 月 11 日以降、観測されていない。

傾斜計⁷⁾では、火山活動によると考えられる特段の変化は認められなかった。

GNSS⁶⁾連続観測によると、えびの高原（硫黄山）周辺の一部の基線では、2015 年 5 月頃からわずかに伸びの傾向が認められていたが、2015 年 10 月頃から停滞している。

えびの高原（硫黄山）周辺では、火口周辺に影響を及ぼす噴火の兆候は認められないが、熱異常域²⁾の拡大が続いているので、今後の火山活動の推移に注意が必要である。

火口周辺では火山ガスに注意が必要である。活火山であることから、規模の小さな噴出現象が突発的に発生する可能性があるため、注意が必要である。

きくらじま **桜島[火口周辺警報（噴火警戒レベル 3、入山規制）]**

昭和火口では、7 月 26 日に爆発的噴火が発生したが、その後はごく小規模な噴火も観測されていない。南岳山頂火口では、8 月まではごく小規模な噴火が時々観測されていたが、9 月以

降は観測されていない。

5 日に実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾は 1 日あたり 20 トン（8 月：40 トン～200 トン）と少ない状態であった。

火山性地震の月回数は 104 回で、前月（8 月：154 回）と同様に少ない状態で経過した。震源は主に、南岳の海拔下 2 km～3 km 付近と、桜島南西部の海拔下 7 km～9 km に分布した。

火山性微動は観測されなかった（8 月：22 分）。

桜島島内での傾斜計⁷⁾、伸縮計¹²⁾による観測では、山体の膨張を示す変化は認められなかった。7 日から 8 日にかけては、わずかな収縮が観測された。

GNSS⁶⁾連続観測では、始良カルデラ（鹿児島湾奥部）の地下のマグマだまりの膨張が続いており、2015 年 1 月頃から地殻変動の膨張速度がやや増大している。島内では、2015 年 8 月の急激な山体膨張の変動以降、山体の収縮傾向がみられていたが、2016 年 1 月頃から停滞している。

昭和火口及び南岳山頂火口の噴火活動は 8 月以降低下しているが、地殻変動観測では、始良カルデラの地下のマグマだまりの膨張が続いていることから、火山活動が再活発化する可能性がある。2015 年 1 月頃から地殻変動の膨張速度がやや増大しており、引き続き火山活動の推移に注意が必要である。

昭和火口及び南岳山頂火口から概ね 2 km の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾及び火砕流¹⁰⁾に警戒が必要である。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石³⁾（火山れき¹¹⁾）が遠方まで風に流されて降るため注意が必要である。爆発的噴火に伴う大きな空振によって窓ガラスが割れるなどのおそれがあるため注意が必要である。また、降雨時には土石流に注意が必要である。

きつまいおうじま **薩摩硫黄島[噴火予報（噴火警戒レベル 1、活火山であることに留意）]**

火山活動に特段の変化はないが、硫黄岳山頂火口では噴煙活動が続いているため、火山灰等が噴出する可能性がある。また、火口付近では火山ガスに注意が必要である。

くちのえらぶじま **口永良部島[火口周辺警報（噴火警戒レベル 3、入山規制）]**

口永良部島の新岳では、2015 年 6 月 19 日のごく小規模な噴火後、噴火は観測されていない。遠望観測では、白色の噴煙が最高で火口縁上 1,000m まで上がった。

13～17 日に実施した現地調査では、これまでの観測と同様に新岳火口および新岳火口西側割れ目付近から白色の噴煙が上がっており、火口

周辺の地形や噴気等の状況に変化はみられなかった。また、赤外熱映像装置²⁾による観測では、特段の変化は認められなかった。

東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所、屋久島町及び気象庁が実施した現地調査では、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量⁵⁾は1日あたり100～400トン（8月：100～200トン）と、2014年8月の噴火前よりもやや多い状態で経過した。

火山性地震は少ない状態で経過したが、下旬にやや増加した。

27日に継続時間1分未満で振幅の小さな火山性微動を1回観測した。島内周辺部まで波形を描く火山性微動を観測したのは、2015年6月18日以来である。また、8月29日以降9月上旬頃まで新岳火口の北側のごく浅いところで火山性微動と考えられる震動を観測している。

GNSS⁶⁾連続観測では、火口を挟む基線で2016年1月頃から縮みの傾向が認められていたが、4日以降は観測点が障害となったため不明である。その他の基線では、火山活動によると考えられる変化は認められなかった。

14、15日に京都大学防災研究所及び気象庁が実施した水準測量では、前回（6月22、23日）と比較して、新岳山体の明瞭な地盤沈降がみられる。

2015年5月29日と同程度の噴火が発生する可能性は低くなっているが、火山ガス（二酸化硫黄）の放出量は、2014年8月の噴火前よりもやや多い状態で経過していることから、引き続き噴火の可能性がある。

新岳火口から概ね2kmの範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾及び火砕流¹⁰⁾に警戒が必要である。向江浜地区から新岳の南西にかけての火口から海岸までの範囲では、火砕流に警戒が必要である。

風下側では、火山灰だけでなく小さな噴石³⁾が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。降雨時には土石流の可能性があるので注意が必要である。

諏訪之瀬島すわのせしま [火口周辺警報（噴火警戒レベル2、火口周辺規制）]

御岳おたけ火口では、噴火が3回発生し、このうち爆発的噴火は1回であった。

今後も火口周辺に影響を及ぼす程度の噴火が発生すると予想されるので、火口から概ね1km

の範囲では、噴火に伴う弾道を描いて飛散する大きな噴石³⁾に警戒が必要である。風下側では火山灰だけでなく小さな噴石³⁾が風に流されて降るおそれがあるため注意が必要である。

なお、以下に挙げる火山では、火山活動に特段の変化はなく、静穏に経過しており、噴火の兆候は認められない。

鶴見岳つるみだけ・伽藍岳がらんだけ [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

霧島山きりしまやま（御鉢おぼち） [噴火予報（噴火警戒レベル1、活火山であることに留意）]

- 1) 火山体の南側で全磁力を観測した場合、全磁力値が減少すると火山体内部で温度上昇が、全磁力値が増加すると火山体内部で温度低下が生じていると推定される。
- 2) 赤外熱映像装置による。赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を検知して温度分布を測定する測器である。熱源から離れた場所から測定することができる利点があるが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合がある。
- 3) 噴石については、大きさによる風の影響の程度の違いによって飛散範囲が大きく異なる。本文中「大きな噴石」とは、「風の影響を受けず弾道を描いて飛散する大きな噴石」のことであり、「小さな噴石」とは、それより小さく「風に流されて降る小さな噴石」のことである。
- 4) 赤熱した溶岩や高温の火山ガス等が、噴煙や雲に映って明るく見える現象。
- 5) 火口から放出される火山ガスには、マグマに溶けていた水蒸気や二酸化硫黄、硫化水素など様々な成分が含まれており、これらのうち、二酸化硫黄はマグマが浅部へ上昇するとその放出量が増加する。気象庁では、二酸化硫黄の放出量を観測し、火山活動の評価に活用している。
- 6) GNSS (Global Navigation Satellite Systems) とは、GPSをはじめとする衛星測位システム全般を示す呼称である。
- 7) 火山活動による山体の傾きを精密に観測する機器。火山体直下へのマグマの貫入等により変化が観測されることがある。
- 8) 山頂火口内とは、雄山山頂にある火口及び火口縁から海岸方向に約100mまでの範囲を指します。
- 9) 阿蘇山特有の微動で、火口直下のごく浅い場所で発生しており、周期0.5～1.0秒、継続時間10秒程度で、中岳西山腹観測点の南北動の振幅が5μm/s以上のものを孤立型微動としています。
- 10) 火山ガスと火山灰等の混合物が、水面や地表面を高速で横方向に広がり、地表の物を巻き込む現象。人体や建物、船舶等に大きな被害を与える恐れがあり、とても危険である。
- 11) 霧島山・桜島では「火山れき」の用語が地元で定着していると考えられることから、付加表現している。
- 12) 火山活動による地殻の伸び縮みを観測する機器。マグマ溜まりや火道内の圧力増加によって生じる火口周辺の変化が観測されることがある。